

プログラム・ノート

山田治生

J. S. バッハ(ジョリー 編曲)：「神は堅き砦」

J. S. バッハ(サーストン 編曲)：「御身が共にあるならば」

J. S. バッハ(ジョリー 編曲)：「いざ来れ、異教徒の救い主よ」

まずは、ヨハン・ゼバスティアン・バッハ(1685～1750)の3つの小品を、ホルンとピアノで演奏。「神は堅き砦」と「いざ来れ、異教徒の救い主よ」の2曲は、オルガンのためのコラル前奏曲をニューヨークで活躍するホルン奏者のデイヴィッド・ジョリー(1948～)が編曲したものである。ホルンの器乐的な妙技が披露される。2曲目に演奏される「御身が共にあるならば」の原曲は、『アンナ・マクダレーナ・バッハの音楽帳』第2集に収められているアリアであるが、バッハ自身の作曲ではなく、実際はゴットフリート・ハインリヒ・シュテルツェル(1690～1749)の作曲と推測されている。ホルンの歌謡性が示される。編曲はリチャード・エリオット・サーストン(1933～2018)。

モーツァルト：ヴァイオリン・ソナタ ホ短調 K. 304 (300c)

続いて、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756～91)のソナタがホルンとピアノで演奏される。原曲のヴァイオリン・ソナタ ホ短調 K. 304 (300c)は、彼のヴァイオリン・ソナタのなかで唯一の短調の作品である。1778年3月、マンハイムで着手され、同年夏、パリで完成された。この年の7月には、マンハイム・パリ旅行に同行した母親を病で亡くす不幸があったが、それが作品に直接影響を及ぼしているかどうかは確かではない。第1楽章では、まず悲劇的な第1主題が奏でられる。第2楽章では、メヌエットのリズムによる哀愁を帯びたロンド主題が何度も現れる。

シューマン：『幻想小曲集』作品73

『幻想小曲集』は、ロベルト・シューマン(1810～56)が創作の円熟期を迎えていた1849年に作曲された。もともと、クラリネットとピアノのために書かれたが、ホルンやヴァイオリン、チェロなどでも演奏される。3つの曲は主題的に関連性を持っている。

第1曲「優しく、表情豊かに」では、冒頭、ほの暗い情熱が感じられる旋律をホルンが歌う。第2曲は「生き生きと、軽快に」。冒頭の主題は第1曲のピアノの主題から派生したもの。第1曲とは対照的な伸びやかな音楽。第3曲は「速く、情熱をもって」。喜びが溢れ出るような情熱的な上昇音型で始まる。陰りを帯びた中間部を経て、また喜ばしい音楽となり、第1曲、第2曲の旋律が回想される。

ドビュッシー(ホイト 編曲):『シャルル・ドルレアン』の3つの歌

クロード・ドビュッシー(1862～1918)は、15世紀フランスの王侯詩人シャルル・ドルレアン(オルレアン公)が残した3つの詩をテキストとして混声4部の無伴奏合唱曲を作った。タイトル通りのたおやかな**第1曲**と対位法的な箇所が特徴的な**第3曲**は1898年に、太鼓のリズムが模倣されている**第2曲**は1908年に作曲され、1909年に全曲が初演された。アメリカのホルン奏者、ウィリアム・ホイトによる4本のホルンへの編曲は、4つの声部からなる原曲をできるだけ尊重したものである。

ベートーヴェン: 六重奏曲 変ホ長調 作品81b

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770～1827)の2本のホルンと弦楽四重奏のための六重奏曲は、作品番号(81b)としては、交響曲第6番(作品68)と同第7番(作品92)の間に位置するが、出版が遅れたため、実際には、彼がウィーンに移住して2、3年後の1795年頃に作曲されたと推測されている。

第1楽章は、2本のホルンと弦楽四重奏に分かれ、2つの独奏楽器のための小協奏曲のようなスタイルを採る。2つの楽器によるハーモニーがまさにホルンの魅力。**第2楽章**は三部形式。主部では2本のホルンがハーモニーを奏で、中間部では2本のホルンがメロディを受け継ぐ。第1ホルンがかなり高い音域まで、第2ホルンがかなり低い音域まで吹くのに注目。**第3楽章**の8分の6拍子の軽快なリズムは狩の角笛を思い起こさせる。

フランセ: 夜想曲と嬉遊曲

ジャン・フランセ(1912～97)は、フランスの作曲家。速筆な彼は幅広いジャンルに多数の作品を残した。『夜想曲と嬉遊曲』は、彼の唯一の4本ホルンのための作品で、1990年に完成された5分ほどの小品である。前半の夜想曲は、アダージョと記された、ゆったりとした夜の音楽。後半の嬉遊曲は、一転して、アレグロ・モデラートの軽快な音楽。ユーモアや遊び心が感じられる。

ブルックナー(ヘルツェル 編曲): アンダンテ 変ニ長調

アントン・ブルックナー(1824～96)の音楽は、交響曲第4番や同第7番の例を出すまでもなく、ホルンとの相性が良い。ブルックナーがオルガン奏者を務めていたからだろうか、それとも、オーストリアの森を愛していたからだろうか。ミヒャエル・ヘルツェル(1936～2017)が編曲したこのアンダンテは、その原曲が明かされていないが、4本のホルンによる、静かで心安らぐ魅力的なコーラルに仕上げられている。